

## 現代と社会システム 第02回課題(4/25提出)

橋本 翔

環境情報学部 4年 70347929 t03792sh

### 1. 復習『ルーマン理論の可能性』p.1-18

「社会理論のなかで社会システム理論がどのような位置付けなのか」「ルーマンが何を目指したのか」をまとめる

ルーマンの理論の目的は、「社会の複雑性を縮減すること」らしい。私達は普段「これは去年千葉で買ったコップだ」とか意味づけをする事で「把握」している。どういうものをかを自分なりに意味づけている。この「把握」を複雑性の縮減というらしい。確かに物に名前付けたりするとぐっと身近になる気がする。

ルーマン理論でいくと、意味づけではなくシステムとして「何が起きているか」を解明してしまう事で、意味づけずに把握できる。

ルーマン(1927-1998)は社会学に統一的・分野横断的アプローチを導入しようとした。

しかし、日本では流行っていない。理由は3つある。

1. 専門用語が難しすぎるし、理論が循環的な論法になっている 2. 初期のルーマンの読み手の議論が無駄にややこしかった 3. 社会学がパーソンズの機能・構造主義 その「個」を捉えられないという欠点からの現象学的社会学・エスノメソドロジー、と移ってきている所に出てきたから受け入れられなかった

機能・構造主義は、地位と役割のネットワークから社会を捉えるアプローチらしい。私はそれは間違っていると思う。状況があってそこに投げ込まれたりする事で社会活動が行われる事もあるし、初期段階では社会構造での位置なんて決まっていなくて、活動の中で秩序ができてくる。

同じ様に、ルーマンは「自己準拠性」として、システム、要素、関係の3つが同時的に現れてくると言っている。どれかが土台になってシステムはできるのではなく、3つが相互に秩序を作るのに関わって、その時のシステムの姿ができる。

ルーマンの「社会システム」では、社会をシステムととらえ、それは3つの要素から成る。

1. 個体の機能 2. つながりかたの構造 3. 創発

70年代と80年代の間で、オートポイエシスを取り入れてルーマン理論は進化した。システム/環境から、自己準拠的システムになったらしい。

## 2. 予習『ルーマン理論の可能性』p.128-142

「重要だと思った点」「わからなかった点」をまとめる

ルーマン以前の社会学では、「個人の行為が集まる事で社会が生まれる」とされていた。しかしルーマン理論は、自己準拠性とオートポイエシスの考えを用いることで、個体の機能、つながり方の構造、そこからの創発が循環的に生まれてくると捉える。システムのその時の姿は、その時の要素が秩序を取っただけの、変化の中の姿だ。

ルーマン理論では、秩序は「コミュニケーション」によって作られるとされる。個体同士が、相手の行為を観測し、意味解釈する事でコミュニケーションが行なわれる。これは「情報が伝達される」のではなく、行為者 A が頭に考えたことを行為で表し、それを観測者 B が観測し、意味解釈しているだけだ。だから、コミュニケーションは意図した通りに伝わらないし、確実に同じ物が伝わったかどうか確かめる方法もない。

意図したとおりに伝わらないコミュニケーションでは、互いに相手の解釈を「期待」する。これは相手が取るだろう行動の可能性がたくさんある事を期待する事でもあるし、自分の取れる行動がたくさんある事でもある。この「期待」の偏りによって、秩序が生まれる。これを「ダブルコンティジェンシー」と呼ぶ。

## 3. 考察

ルーマンの言う「複雑性の縮減」は、個々人の意味レベルではなく、システムとして縮減するという点がフッサールの言っているエポケーと現象学的還元の目的に似ている。みんなが色々な見方を持っているから、みんな価値観が違うから、勝手に意味づけしていたら社会は荒れる。フッサールはそう考えて、現象学的還元を行ない、人間の「意味づけ」の機能を明らかにしようとした。ルーマン理論はそれを越えて、「個人レベルの意味で見ない為のツール」として使える。

## 4. 参考文献

- ・ 村中知子(著)、『ルーマン理論の可能性』恒星社厚生閣、1996
- ・ 竹田青嗣(著)、『現象学は思考の原理である』筑摩書房、2004
- ・ Paul Dourish(著)、『Where the action is: The Foundations Of Embodied Interaction』Bradford Books、2001